【150】

氏　名（本　籍）	久保忠夫（宮城県）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　499　号
学位授与年月日	平成元年３月25日
学位授与の要件	学位規則第５条第２項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	萩原朔太郎論

主　査	筑波大学教授	文学博士	平岡敏夫
副　査	筑波大学教授	文学博士	伊藤　博
副　査	筑波大学教授		奥野純一
副　査	筑波大学教授	文学博士	内山知也

論　文　の　要　旨

本論文は，近代日本の代表的な詩人萩原朔太郎（1986～1942，明治19～昭和17）について，詩を中心とするその文学的業績を，ほとんどその全生涯にわたり，生活・環境・時代との相関のもとに論じたものである。

まず，冒頭「序に代えて」において，萩原朔太郎をいかにとらえ，いかに一元的に説明するかという方法の問題を論じている。日本における前近代から近代への過度期に青年時代を送ったことが朔太郎の性格と相俟って，代表的な三詩集の詩鏡・詩風，すなわち第一の『月に吠える』（大正６年）における焦燥と疲労，それを基底とする第二の『青猫』（大正12年），さらに第三の『氷島』（昭和９年）における，現実的，意志的でありながら，『月に吠える』以来，変わることのない構造，を形成せしめたとして，過度期の時代の人生に煩悶しつつ，ごまかさず，避けず，真剣に時代に処した朔太郎の人間と文学を大きくとらえている。このことによって，本論文の数多い各論は一元的な展望の中に位置づけられることになるのである。

本論文は六部から成る。Ⅰではまず，「萩原朔太郎の抒情的精神」で，朔太郎の作詩における根本的態度を「勘定の尊重」「動機の必然性」「実感」の三側面からとらえ，この実践による朔太郎の特性を明らかにした上で，上下の七論文により，朔太郎の家庭環境と人間形成，前橋中学校時代，高等学校時代，中退後の東京漂泊に及び，与謝野晶子による短歌への開眼と，内には大逆事件，外には辛亥革命という歴史的事件の朔太郎に与えた影響を指摘している。Ⅱでは，まず「『愛憐詩篇』への道」によって，詩壇に登場する朔太郎とそこに至るまでの道程を考察，「みちゆき」などの詩編に北原白秋『思ひ出』からの影響を見つつ，以下朔太郎詩の形成に大きな意味をもったエレナと呼ば

れる女性との恋愛，石川啄木からの影響と「郷土望景詩」との関係に及び，北原白秋と三木露風の両陣営が対立する大正初期詩壇の中に朔太郎を位置づけ，とくに蒲原有明との関係を再検討している。

Ⅲでは，朔太郎の処女詩集『月に吠える』の時期を考察している。まず最初に，『月に吠える』において，従来注意されることの多かった二篇の「竹」の詩のうち，「ますぐなるもの地面に生え」ではじまる一編を，遺族所有の詩稿を手ががりとして論及，動詞連用形のくり返しによる不安定感，焦燥感を夏目漱石「行人」の主人公に重ねつつ，「浄罪詩篇」と呼ばれる他の詩編等との比較にも及び，おのずからもうひとつの「竹」の詩編の性格をもうかがえるようになっている。つづく「朔太郎詩の分析」は，「竹」への道をたどり，擬声語・擬態語・詩語・詩形などその表現の独自性を綿密に考察したものである。さらに，『月に吠える』の時期の朔太郎は「人生いかに生くべきか」の煩悶から，ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』を通してキリスト教の愛に触れたことを，三編の論文で考察，朔太郎が読んだ『カラマゾフの兄弟』のテキストをもほとんど確定している。朔太郎とマンドリン演奏は有名であるが，『月に吠える』の時期における音楽の意味を，幼少時代からさかのぼって，戸山学校・音楽学校とのかかわり，介在した友人たち，邦楽との関係にまでたどることで説き明かしている（以上，上巻）。

Ⅳでは，第二詩集『青猫』の時期を考察している。まず最初に，北原白秋『思ひ出』と，ゲーテ「魔王」の影響から『青猫』の詩編「遺伝」や「自然の背後に隠れて居る」が成立して行く様相をうかがい，その基底にハーバート・スペンサーの心理学説，ジャック・ロンドン『野性の呼声』『アダム以前』等の享受があることを指摘し，H・D　ウェルズのSFとの接触も深まっている。『青猫』の詩編の漢字と仮名まじり工合いは仮名に傾いているが，「てふ，てふ，てふ」の論文は朔太郎の詩と漢字，仮名の問題を考察したもので，山村暮鳥の有名な平仮名詩「風景」にも言及し，具体的に両者の影響関係を論じて，口語自由詩を確立したとされる朔太郎詩の本質に迫っている。

『青猫』の時代には，ほぼ三年間，詩を発表していない時期があるが，思索に向かったこの時期に，朔太郎が糧とした哲学書として，ジェームズ『自我と意識』『心理学精義』，『ベルグソンの哲学』等、広い意味での哲学書十冊をつきとめ，それらが『新しき欲情』のアフォルズム集，さらには『詩の原理』等の成果をもたらしたことを詳細に実証しているのが，Ⅳの結びの「萩原朔太郎の『ノート』研究」である。

Ⅴでは，大正14年２月，故郷前橋から妻子をともなって上京，昭和９年朔太郎の後期の詩業を代表する『氷島』を刊行するまでの時期を考察している。まず，大正14年８月刊行の『純情小曲集』に収められた「郷土望景詩」を取りあげ，その創作動機，一編を除いて他の九編が全て文語で書かれていることの意味，上京前後の生活とのかかわり等を追求している。上京してからの朔太郎の生活は，「大正14年夏」「鎌倉の一年」「離婚」の章で具体的にたどられているが，室生犀星，芥川龍之介，北原白秋らとの交友を探り，犀星の戯曲「友情」を援用しつつ，離婚に至るまでの朔太郎の馬込時代の生活を明らかにしている。その間，鎌倉に住んだ時期もつきとめ，菊田一夫と菊田が脚色した林芙美子『放浪記』の問題にも及ぶところ，朔太郎のかくれた側面がよくうかがえる。

『氷書』が右のような生活を背景にして生まれたことは二編の『氷島』言及によっても明らかであるが，「『氷島』の詩と真実」においては，昭和４年10月14日，妻稲子と協議離婚する前に，妻出奔後，二児を家郷の母に託すべく，朔太郎が帰郷したのをその年の夏と推定，「昭和４年の冬，妻と離別し二児を抱へて故郷に帰る」と前書きした，『氷島』の代表的詩篇「帰郷」の〈詩〉を指摘している。同様の指摘は従来なかったわけではないが，本論文においては，上州の風景・烈風・夜汽車等もあわせ考察，より説得的である。この時期には，朔太郎が古典の世界にも沈潜したこきを注意し，まず『唐詩選』，とくに王翰「涼州詞」，王維「送別」等に触れ，口語自由詩の袋小路脱出の模索のなかで漢詩に行き当たったことを指摘している。

また，詩論集『純正詩論』（昭和10年），アフォリズム集『虚妄の正義』（昭和４年）と『氷島』との関係に言及したのち，古典鑑賞とされている『恋愛名歌集』（昭和６年）と『郷愁の詩人与謝蕪村』（昭和11年）を対象とする。これらは鑑賞というよりも古典を契機とする創作であるとし，とくに蕪村受容を論じ，「郷愁の詩人」と規定する原理や執筆の動機を考察，さらに『恋愛名歌集』における本文改作をきびしく批判している。Ⅴの結びは，散文詩風な小説ともいうべき「猫町」（昭和10年）の成立に，ルイス・キャロルの「鏡世界」がかかわっていることを明らかにした比較文学的な考察である。

Ⅵでは，昭和十年代を対象として考察している。この時期の朔太郎は，ほとんど詩作せず，評論・随想の領域で仕事をしているが，冒頭の「院子夫人」は，この時期の朔太郎にととって大きな意味を持った女性を論じたもので，従来のあやまりを正し，朔太郎の文章を裏づけ，さらに詳細な「補」を加えている。昭和十年代における朔太郎の論戦応酬ぶりについての考察につづき，評論集『日本への回帰』（昭和13年）が対象とされるが，朔太郎における外国，あるいはヨーロッパ，とくにはドイツとのかかわりに言及，日本への回帰の問題を照射している。『絶望の逃走』（昭和10年），『港にて』（昭和15年）をふくむ四冊のアフォリズム集の特質とそのスタイルを詳細に論じ，ニーチェの影響をも見出して，『宿命』（昭和14年）の散文詩との関係にも言及している。結びの「晩年の萩原朔太郎」は，昭和17年３月11日に死去するまでを総括したもので，『樋口一葉全集』編集やそれに先立つ「南京陥落の日」の作詩等に触れつつ，「生活の目標」を求めてさまよう，この漂泊者の憩いが死によってのみもたらされたと論じて本論文は閉じられている。（以上，下巻）。

審　査　の　要　旨

本論文は，久保忠夫氏が40年にわたる萩原朔太郎研究を集大成したもので，その一貫した長年の研究は，朔太郎の詩業と生涯のほぼ全域にわたっている。その研究方法はきわめて実証的であたり，旧来のあやまりを次々に正し，新しい資料を発掘し，朔太郎にかかわるほとんどの事象に目をくばり，的確な判断をくだしている。アフォリズムをもふくめた作品の表現やスタイルにも最新の注意を払い，よく朔太郎の独自性を明らかにしている。さらに言えば，本論文は，詩人とその作品を時代や環境と切り離すことなく，広い視野の中でとらえており，その上，ドストエフスキー，ハー

バート・スペンサー，ジャック・ロンドン，ルイス・キャロル，ニーチェ等々，外国の文学・思想に及ぶ比較文学的考察をも，媒体やテキストの探索を通して手堅く行っている。この点も大きく評価されるべきであろう。

六部に分かれた，体系化されているが，長期間，逐次発表されて来ているため，若干の重複や並列にやや難が見受けられるところがある。個々の作品論をもっとスペースを取って展開してほしかったという希望もないわけではないが，各論文のあとに「補」を付して，その後の研究を加えるという配慮は有効にはたらいている。本論文が萩原朔太郎研究に新しい期を画し，ひいては日本近代文学研究において，きわめて重要な位置を占めるであろうことは疑いないところである。

よって、著者は文学博士の学位を受ける資格があるものと認める。